

ニュースを私はこう見る



中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)

中国の“走資派”批判は何を意味する？

▶人民日報 名指し同様に鄧氏批判 「獨理論」引合いに(3.1サンケイ) ▶「自己批判しない鄧氏」 清華大でも名指し批判(3.3日経) ▶鄧氏ら「右派指導者」を審査 党中央委が特別委(3.18毎日) ▶鄧副首相の写真撤去 走資派批判に拍車(3.20朝日)

周恩来なき中国の内政がにわかにならぬ動化し始め、ここ二ヶ月来、いわゆる「走資派」批判の強風が吹き荒れていく。多くの情報の中から、ほぼ確定し得る状況を描いてみると、周恩来の葬儀がおわったのちの1月下旬から2月上旬にかけて、党中央委員会ないしは中央政治局会議が開かれ、國務院総理(首相)の人選を行なうべきであったにもかかわらず、会議の席上でかその舞台裏でかとはともかく、筆頭副総理の鄧小平を総理に昇格させることに大きな反対があり、その結果、妥協的な暫定人事として、いわば第三者であった華国鋒が「事務取り扱い」的な意味あいでも首相代行に任命された、ということになる。この直後から、清華大学や北京大学の壁新聞で「走資派」批判が沸き起こり、次第にエスカレートしてこれらの壁新聞では鄧小平が名指しで批判され、やがて『人民日報』紙上でも「右からの巻き返し」の風潮をおおった例の人間は、文化大革命の前に劉少奇に追隨して修正主義を推し進め、これまでの社会主義革命運動のたびに對抗し、文化大革命で批判されながら悔い改めようとしないうる走資派である(『人民日報』一九七六年三月十日付社説「巻き返しは人心をえられない」と)、きわめて明瞭な鄧小平批判が展開されるに至った。しかも、「彼らの巻き返しの活動には、理論があり、綱領があり、

組織がある」(同上)とされているところからすれば、いわゆる「走資派」の潜在的基盤はきわめて広範囲にわたっており、いかに根強く脱文革・反文革の潮流が存在しているかが推察できよう。文化大革命を経過し、毛沢東主席がともかく健在である現時点でも、状況はこのようである。これでは一体、毛沢東なき中国はどうなるか。しかも、「走資派」のいわゆる経済主義は、中国の内外情勢や工業化の課題を考えたとき、より多くの必然性をもち得るものだと思われるだけに、時は「走資派」に味方するかもしれない。いわゆる文革派の人びとは、このように考えたのではなからうか。こうした危機意識のなかで、鄧小平らを右傾修正主義、ブルジョア的復権と批判し、その政策を「階級闘争」を忘れた「唯生産力論」、「経済台風」、「業務台風」、「利潤第一主義」、「近代化路線」として厳しく非難する必要があったのであろう。

だが、明らかに江青夫人を今回の事態の演出者とする文革派にとって、急拠、鄧小平批判を必要としたきっかけは、もっと人間臭いところにあったのかもしれない。私は、鄧小平が最後に公式の場に現われたのが1月15日の周恩来追悼式であり、そこで鄧小平が参加者を代表して弔辞を読んだことを、冠婚葬祭に敏感な中国人社会の特質に照して大いに重視している。しかも鄧小平の弔辞は、まさに世紀の宰相・周恩來の事績を鄧小平自身の立場から総括したもの等に等しいものであった。そこで鄧小平は中国革命の段階での周恩來の歩みについては実に詳しく言及して歴史的な意味づけを行なっているのに対し、建国後、とくに文化大革命の段階に関しては、きわめて抽象的に状況を語っているにすぎないのである。この追悼式の中で、江青女史ら文革派の人びとはなにを感じたであろうか。彼女らの脳裏には、あるいは毛沢東の死に際しての追悼式の場面が連想され毛沢東の生涯を総括する鄧小平の姿が二重映しになったのかもしれない。ともあれ、今回の「走資派」批判によって、「走資派」批判の背景は、たんに鄧小平批判にとどまらず、故周恩來批判をも含意しているのではないかと、いう推測が可能になった。1月19日以降、天安門前広場からは周恩來を悼んで全国各地から届けられた献花が撤去されたとの確かな情報もあり、また、『人民日報』などには、世紀の周恩來を追悼する論文や記事がもはや掲載されなくなってしまう。

だが、文革派がこのように矛先を定めれば定めるほど、毛沢東以後の中国が時間的に迫りつつあるなかで、「走資派」への潜在的な支持基盤が逆に拡がるのではなからうか。鄧小平は依然として公職にとどまっているようである。